

見沼代用水の歴史

17世紀の新田開発は、地域の排水を貯留した「溜井」を水源とする「関東流」と呼ばれる水利技術に支えられていましたが、その手法による新田開発は限界に達していました。

そこで、八代将軍徳川吉宗の命を受けた「紀州流」の優れた技術者であった井澤弥惣兵衛為永は、平野の中の池沼に着目し、それらを水田に変える発想により、広大な新田開発を行うこととしました。当時5000ヘクタールの農地をかんがいでいた見沼溜井を廃止し、その敷地を干拓することで、約1200ヘクタールを新田とし、代わりの水

源を確保するため、約60km離れた利根川から引水する見沼代用水（見沼に「代わる」用水）を築造しました。見沼代用水の築造によって、既存水田の騎西領用水路（新川用水路）などに利根川の豊富な水を安定して用水供給することが可能となりました。

また、用水の安定により、新たに黒沼笠原沼用水路（中島用水路）などが築造されたことで、多くの新田開発が行われ、日本最大となる1万5000ヘクタールの水田を潤すことができるようになりました。これにより、食料増産と幕府の財政再建に大きく貢献しました。

紀州流の技術の結集

工事は、1727年9月から翌年3月までの6カ月間という驚異的な短期間で実施され、水路5.2km、排水路31.3km、橋梁130力所などが築造されました。

これらの工事を可能としたのは、先進的な「紀州流」技術を結集した結果でした。見沼代用水の完成には、「水盛器」を用いた先進的な水準測量技術、当

時の木造構造物としては我が国最大規模であった「元坎」、「伏越」、「掛渡井」等の築造技術、パナマ運河より約180年も早い閘門式運河「通船堀」の考案など、当時の最先端の土木技術が結集されました。また、見沼代用水の路線計画においては、地区内の既存河川である星川を用水路として一部活用することで、工期を大きく短縮することができました。

「世界かんがい施設遺産」とは？

建設から100年以上が経過し、かんがい農業の発展に貢献したものの、卓越した技術により建設されたもの等、歴史的・技術的・社会的価値のあるかんがい施設が登録・表彰されます。日本の登録数は今年度で39施設です。

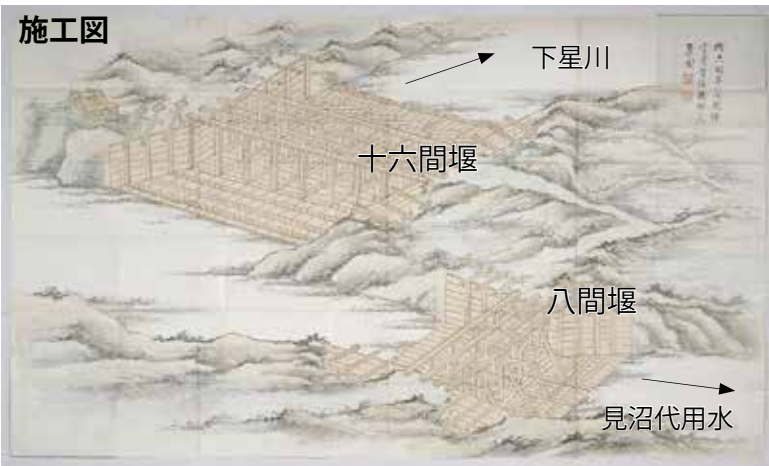
「水盛器」とは？

竹竿と木材を加工して作った測量器具で、その精度は、取水地点から最下流部まで測量延長約80kmで僅か6cmでした。



▲開削時の測量に用いられた水盛器（レプリカ）

施工図



▲十六間堰と八間堰（古図：埼玉県立歴史と民俗の博物館所蔵）